令和3年度優秀映画鑑賞推進事業

米子なつかしの名画劇場

映画史を艶やかに彩ってきた監督と女優との宿命的な出会い―
数ある名作、代表作から選んだ3作品です

令和４年 1月23日（日） 開場/9:30
米子市公会堂 大ホール

西河（にしかわ） 克己（かつみ）監督 × 吉永（よしなが） 小百合（さゆり）

10:30～ 伊豆の踊子（87分）

増村（ますむら） 保造（やすぞう）監督 × 若尾（わかお） 文子（あやこ）

13:00～ 華岡青洲の妻（99分）

成瀬（なるせ） 巳喜男（みきお）監督 × 高峰（たかみね） 秀子（ひでこ）

15:00～ 稲 妻（87分）

1日券 500円

チケット取扱い：米子市公会堂・米子市文化ホール
米子市淀江文化センター・米子市立山陰歴史館 ほか
お問い合わせ：米子市公会堂 ☎(0859)22-3236

主　　催：米子市・(一財)米子市文化財団【米子市公会堂】・国立映画アーカイブ
特別協力：文化庁・(社)日本映画製作者連盟・全国興行生活衛生同業組合連合会

駐車場：ひまわり駐車場(1時間無料)・YEASTY PLACE(1時間無料)
米子市役所(6時間無料)
※無料処理をしますので必ず駐車券をお持ちください。

お客様～必ずお読み下さい～
感染拡大状況によっては公演の延期・中止等の場合があります。チケットの半券に、氏名・連絡先を事前にご記入しご来場ください。
公演当日、37.5度以上の発熱等、体調のすぐれない方の来場はご遠慮ください。当日は、検温、消毒、マスクの着用にご協力をお願いします。

臨場感あふれる映画美、貴重な35ミリフィルム映画での上映会です。
日本の映画文化のすばらしさを米子市公会堂の巨大銀幕でお楽しみください。

◆ 伊豆の踊子（いずのおどりこ）

［１９６３年　日活］
（カラー／シネマスコープ／モノラル／87分）

監督/西河克巳　　原作/川端康成
出演者/吉永小百合、高橋英樹、大坂志郎、浪花千栄子、十朱幸代 ほか

川端康成による有名な同名小説の4度目の映画化である。日活では初めての試みで、当時同社の若手スターだった吉永小百合と高橋英樹が主演した。宇野重吉扮する大学教授の回想という形式を採っているのが特徴で、現在と過去をカラーと白黒で使い分け、現代の女性と回想中の踊り子を吉永に二役で演じさせたことについて、西河克己監督はこれまでの『伊豆の踊子』と違った試みをやりたかった、と述べている。原作中の有名な台詞「いい人は、いい人ね。」を意図的にシナリオから削除したことにも、新しい「踊子」像を作ろうとした野心が表れているが、田中絹代出演による初の映画化（1933）でも、後の映画化と比較しても、全体としてはセンチメンタルな作品に仕上がっている、と言えるだろう。川端はこの作品のロケーション撮影を訪れているが、完成した作品について川端が各地で高い評価を公言したので、西河監督がかえって戸惑ったという逸話も残っている。

◆ 華岡青洲の妻（はなおかせいしゅうのつま）

［１９６７年 大映（京都）］
（白黒／シネマスコープ／モノラル（濃淡型）／99分）

監督/増村保造　　原作/有吉佐和子
出演者/市川雷蔵、若尾文子、高峰秀子、伊藤雄之助、渡辺美佐子 ほか

有吉佐和子の同名原作を、新藤兼人の脚本を得て増村保造が映画化した作品。日本初の麻酔薬の開発者として名高い、紀州の医師華岡青洲をめぐる母と妻の葛藤を中心に描いている。加恵は青洲の母お継に憧れて21歳で華岡家の嫁となった。京都で医学修行を積んでいた夫が帰国するのは3年後である。やがて、加恵をさしおいて、なにくれとなく夫の世話を焼く姑は加恵のなかでライバルとなっていく。嫁と姑のひそやかな対立をよそに、青洲はひたすら麻酔薬の研究に打ち込んでいった。動物実験の段階を終えて、人体を用い効果を試すべきときがきた。その時、自ら実験台になることを申し出たのは二人の女、母と妻であった。譲らない二人に、青洲は同じように薬を与えるのだったが…。増村保造はこの映画化に熱心で、企画会議で永田雅一社長に訴えて製作許可を得た。増村自身は、女の戦いを利用しつつ薬を完成させた華岡青洲に魅力を感じていたらしい。
「キネマ旬報」ベストテン第5位。

◆ 稲妻（いなづま）

［１９５２年 大映（東京）］
（白黒／スタンダード／モノラル／87分）

監督/成瀬巳喜男　　原作/林芙美子
出演者/高峰秀子、三浦光子、香川京子、村田知英子、根上淳ほか

それぞれ父親の違う四人の子供たち。母はそれをそのまま受け入れて暮らしているが、末っ子の清子（高峰秀子）は姉や兄たちの身勝手で無気力な生き方に生理的な嫌悪を抱いている。山の手の世田谷で一人下宿生活を送っているのもそのためだ。次女の光子（三浦光子）が飼っている子猫のように、弱々しい生きものとして周りの世話になりたくないのだ。林芙美子の同名小説は1936年に発表されたもので、実母をモデルにしたものだと言われている。監督の成瀬巳喜男は、戦前の松竹時代から林芙美子に関心を抱いていたが、映画化の機会をもてないままであった。この作品は『めし』（1951）に続く林文学の映画化である。下町の庶民の姿をいたずらに劇化することなく、静かに見つめているところに特徴がある。
田中澄江脚本。「キネマ旬報」ベストテン第2位。

バス割引乗車券（２００円割引）をお配りします

当日（1/23）に市内路線バスで使える200円割引券を、ご希望の方にチケット購入時にお配りします。
※往復ご利用の方は２枚お配りします。　※小学生以下は使用できません。